

かけだ詩⑤

そだちと臨床研究会

川畑 隆
かわばた たかし

講義の思い出

構造は仕組みで
機能は働き
システムはつながりで
絶対的とは
必ずそうだったこと
相対的とは
比べるものによって違うから
そうかもしれないけど
そうじゃないかもしれない
ってこと

警視庁は
東京都警をそう呼んでいて
警察庁は
全国の警察のトップ
保育所は厚生労働省の管轄

保育に欠ける子の児童福祉施設
幼稚園は文部科学省
幼児教育を行う教育機関

児童とは
日常的には小学生のことだけど
児童福祉法では
赤ちゃんから十八歳になるまでをいう

犯罪少年とは
男の子だけのことじゃなくて
女の子も含めてそう呼ぶ

以上
本日の「福祉心理学」
一般教養コーナーでした！

二点セット

雨が降っている
扇風機の弱の風を受け
肌布団を一枚かけて横になっている
窓の外を眺めながら聴こえるのは雨音だけ
それは幼い頃の静かな平日の午前

テレビの大相撲を横目で観ながら
おやつは蒸(ふ)かしたサツマイモ
それに高菜の漬物はうってつけ
お茶は熱くないのがいい
小学校から帰った平日の午後の定番

夏は蚊帳(かや)を吊った
吊る前に襖に幻燈を映したこともあった
両親の激しい喧嘩を
そのころ同居していた叔母が必死でとめていた
布団を頭から被りその様子を震えながら聴いた

鹿児島は台風銀座
父があちこちの窓に板を打ち付ける
夕食のおかずはサバ缶と野菜を煮込んだもの
たしか台風料理と呼んでいた
雨風が激しくなると近くの防空壕跡に避難した

その鹿児島で三〇センチの雪が降った
家の前の田んぼで四つ上の兄とはしゃいだ
足がしもやけになつて痛痒く
温かい部屋で食べたおじやが最高にうまかった
先にも後にもそれだけの雪は降らなかつた
雨が降っている
今も
あの頃も

蚊帳：蚊を防ぐために吊り下げて寝床を覆う網のようなもの
幻燈：スライド映写のようなもの 昔話をよく観た

汽車が走っていた

引越しの日は嬉しかったのだろう
はしゃいで玄関の上り口から土間に落ちた
鹿児島から北九州の小倉へ
小学三年生に上がる前の春休み

街の外れにあつた借家の縁側に座ると
日豊線の汽車が手の届くようなところで
太い汽笛に大きな図体をくねらせた
縁側の隅にたしか便所があつた
母とよく汽車に乗って買い出しに出かけた
「腰ぎんちゃく」と昔から呼ばれていた
機関車の吐く煙が入らないように
トンネルの前で必ず窓を閉めた

鹿児島行きの夜行列車は空席ばかり

縁側からの観察でそれがわかる
でも乗ってわかった みんな横になっていた
夏休みの家族での鹿児島帰省のハプニング

西鹿児島駅近くの市場の魚屋の
ハエ除け線香の入った熱い缶を掴んでしまった
アカンベエの舌を四つ上の兄が掌で覆ってくれた
後々その兄が就職祝いにコートを買ってくれた

六つ上の兄が背番号十四で甲子園に出た
父と次兄と三人で夜行列車で西宮まで応援に行った
背中の十四番はベンチ前の円陣で一番目立っていた
はじめての都会は父がいても心細く落ち着かなかった

大学に入り京都の八瀬(やせ)に下宿した
寮生活のような賑やかな時間の隙間で
川の流れる音ばかりが耳にへばりついた
「汽車が走らない」という歌を作った

四畳半

八瀬から修学院に下宿をかわった
母が決めた賄(まかない)付きの下宿から脱出した

うまいラーメン屋台が九時に店を出した
行きつけの一福食堂の夕食を我慢して九時を待った

お酒を飲み始めた たくさん飲んだ
朝目覚めると自分の部屋の布団に寝ている
でも昨夜の記憶がない
黒いジャケツトが赤茶色に汚れている

記憶をたどると 夢か現実か
タクシーの運転手さんから赤土に放り出される光景
それに残金から昨夜使った金額を知り頭を抱えた
二合炊きの炊飯器を買って食費を節約することにした

きょうは鯉節 きょうは梅干し きょうは納豆
何といたって 炊き立ての白飯だけでご馳走だった
そんな生活が続いていると目の調子がちよつとおかしい
夕方になるとかすむのだ

夏休みに帰省し母に告げると
総合病院の眼科に連れて行かれた すぐに内科にまわされ
ビタミンE不足による「鳥目」だと診断された
「哀れだ」と母が涙を浮かべた

哀れだといいながら母から送られてくるのは素麺ばかり
電熱器のある二階の部屋と一階の炊事場を往ったり復たり
ぬるい素麺でも早く食べたくて駆け上がる階段で躓いた
埃だらけの階段に散らばった麺をかき集める哀れ

殺風景な四畳半 近所の店のリポピタンDののぼりが飾った

一合飯のご飯茶碗は学食と同じものだった
その頃でも立派な犯罪
破目をはずしたユーチューバーの気持ちはわかる

「四畳半なんとか」などの日活ロマンポルノの全盛期
一乗寺の京一会館で午前零時からの女優たちの舞台挨拶
ごった返す場内の最後列で友だちと代り番この肩車と歓声
あのエネルギーがなつかしい

四十年以上が過ぎた

賄：食事が出されること
鳥目：夜盲症とも呼んだ

綱渡りくオンライン

虐待者はいかにも悪者（わるもの）
だから犯罪防止のように虐待防止
でも虐待をしない良者（よいもの）と
悪者の境目はどこにある
人生と子育ての大変さは
保護者のもっている運に左右される

虐待防止の速効で目に見える成果には
虐待する保護者と子どもとの分離が一番
でも分離して日常生活が取り上げられると
親子関係が積みあがりにくい
だから分離せずに家族支援
でもそれでは虐待が起きない保証はない

つまり綱渡りのようなもの
綱から落ちてしまうかもしれない
落ちたら虐待防止の失敗
最初から綱に乗らないことにもなりかねない
家族支援をとおして虐待を防止することからの撤退
それでいいのか

今はこの綱渡りを続け
綱から落ちない精度をどう高めるか
国民から励まされるべきはそこだ

原因

今回の少年事件の原因ですか
やはり子育ての失敗でしょうか

家族の問題が根本にあると思います

今回の少年事件の原因ですか

近所でも評判のよい家族らしいですね

少年の心の闇と申しましょうか

心の闇ってなんでしょう

：闇だから闇なんですよ

コメントターの苦し紛れの因果論

よい家族ってあるんだろうか

わるい家族ってあるんだろうか

家族はそれぞれじゃないんだろうか

うまくいかないことをいっぱい抱えた家族

うまくいかないことがそんなにいっぱいではない家族

分けたければそういう分け方もある

よいわるいと偉そうに品定めしている暇があったら

うまくいかないことの少しでも援助を志せる

そこが味噌の分け方

でも原因がわからないと指導のしようがないでしょう

そうですよねと答えてしまいそうなフレーズ

原因を決めてしまいたいのは誰のどんなニードか

うまくいかないことばかりで駄目な私たち家族

いや こんなふうによくいったことってありましたよね

粗(あら)よりもうまくいく芽をどう見つけるか

大学生時代に書いた歌詞

汽車が走らない

声をかけたら 立ち止まり振り返る

見知らぬその顔に 微笑みがよぎる

ほんのこの前までは 見慣れた人たちの中

新しい 懐かしい その微笑みだった

だけど 夜になって 耳をすましてみても

そこには 自分のつぶやきばかり

人が来ない 人が来ない

目の前に浮かぶから 手招きしても

人が来ない 想い出の

ドアを開けたら 少し暗い灯り

さっきの茶碗が こたつの上にひとつ

ほんのこの前までの 賑やかな時間が

しだいに遠ざかってしまうが また浮き上がる

窓に寄り添い 耳をすましてみるけれども

そこには 川の流れる音ばかり

汽車が走らない 汽車が走らない

ひと眠りして 目が覚めても

汽車が走らない やっぱり

★<https://fire.st/5m2GHN>に歌があります。